

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

フォンターナ広場 イタリアの陰謀

2012年・イタリア、フランス合作映画
配給/ムヴィオラ・129分

2013 (平成25) 年 11 月 18 日鑑賞

GAGA試写室

Data

監督・原案・脚本：マルコ・トゥリオ・ジョルダーナ

原作：パオロ・クッキアレツリ

出演：ヴァレリオ・マスタンドレア

／ピエルフランチェスコ・フ

アヴィーノ／ミケーラ・チェ

スコン／ラウラ・キアッティ

／ファブリツィオ・ジフーニ

／ルイーダ・ロ・カーシヨ／

ジョルジョ・コランジェリ／

オマーロ・アントヌッティ／

トマス・トラバッキ

👁️👁️ みどころ

学生運動が高揚し、ベトナム反戦運動が盛り上がった1960年代後半、日本では1969年1月の東大安田講堂事件に世間の注目が集まった。そんな時代にイタリアでは12月12日にフォンターナ広場に面した全国農業銀行の爆破事件が！

その事件の犯人はアナキスト。当初の見込みはそうだったが、極右組織、ネオファシストや軍警察、情報局さらにはNATO軍やCIAまでの関与が疑われる中、いかなる捜査を…。

現実に起きた警視と容疑者2人の視点を中核に描く本作は興味深いが、チョー難解！本作の鑑賞にはバックグラウンドの勉強が不可欠だが、それも映画鑑賞の醍醐味では…？こんな映画必見！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■よくそこれを映画に！しかし、難解！■□■

本作のタイトルをただで、本作が何の映画かわかる人は少ないはず。1967年に大学に入り、学生運動に身を投じた私ですら、1969年12月12日にイタリアのミラノにあるフォンターナ広場に面した全国農業銀行が爆破され、死者17名、負傷者88名という大惨事が発生したことを全然知らなかったのだから。この爆破事件について、イタリアの捜査当局は左翼の関与を疑い、アナキストたちを次々と連行したが、さて犯人は？ちなみに、去る10月28日に北京の天安門で起きた車の突入・炎上事件は、新疆ウイグル族の独立派組織による「組織的テロ」とされた。他方、11月6日に山西省・太原市の中国共産党省委員会ビル周辺で起きた連続爆破事件は、「不満分子」による「反社会的で重大な暴力犯罪」として幕引きされた。しかし、中国共産党の第18期中央委員会第3回全

体会議（三中全会）閉幕直後の1月16日には、再び新疆ウイグル自治区カシュガルのマラルベシ県で武装集団による派出所襲撃事件が発生したが、これはウイグル族によるものとされ、全員その場で射殺された。しかし、それって本当？中国当局の発表は信用できるの？

本作のプレスシートに『遙かなる冷戦』と題する解説を載せている、立命館大学文学部教授の竹山博英氏は1948年生まれだから多分私と同級生だが、氏はイタリア文学者だけにその解説はメチャ詳しい。あの当時のイタリアは日本以上に共産党の力が強かったし、学生運動と労働運動が高揚していたことは私もよく知っている。しかし、アナキストの他に、極右組織やネオファシスト等の活動があったうえ、NATO軍やCIAなど海外の組織がうごめいていたことまでは知らなかった。更に日本でも、1949年に起きた列車の脱線、転覆事故により3人の乗務員が死亡した事故について、戦後最大の冤罪事件となった「松川事件」には政府や軍警察、情報局などの関与が疑われていたから、この爆破事件にも同じような可能性があったことは当然だ。

本作は、そんな現実の事件を40年以上も前に現場から300mほどしか離れていない場所で目撃したという、マルコ・トゥリオ・ジョルダーナ監督が自ら原案と脚本を書き、監督した映画だ。登場人物は、本作の主人公となるルイーダ・カラブレイジ警視（ヴァレリオ・マスタンドレア）とアナキストのリーダーであるジュゼッペ・ピネッリ（ピエルフランチェスコ・ファヴィーノ）はもちろん、ジュゼッペ・サラガト大統領（オマーロ・アントヌッチェ）、アリアーノ・ルモール首相（アレッシンドロ・ブレサネッロ）、アルド・モーロ外相（ファブリツィオ・ジフィーニ）もすべて実名だというから恐れ入る。しかし、本作は決してドキュメンタリーではなく、まさに人間ドラマ。よくぞ、そんな現実の事件を映画に！しかし、竹山氏が「フォンターナ広場の事件は背景が複雑で、登場人物も多く、とても分かりにくい。」と述べているように、本作はまさに難解！したがって、本作を鑑賞するについては、かなりの勇気と覚悟を持つことが不可欠だ。

■□□どんな政治勢力が？東西冷戦の影響は？■□□

日本で1968年以降に盛り上がった学生運動は、当初は大学の改革を求めるテーマが中心だったが、次第にベトナム戦争反対、安保条約改定反対という政治的テーマに広がっていった。しかし、1969年1月に発生した「安田講堂での攻防戦」を契機として学生運動は急激に冷え込み、1972年2月の「浅間山荘事件」以降、連合赤軍などごく一部の過激派の闘争に収斂していった。竹山氏や私はそんなあの当時の政治状況と対比しながら、本作の爆破事件の犯人像を追及していくことができるが、私に全く理解できないのは、1945年から1989年まで続いた「東西冷戦構造」がそのバックグラウンドとして存在しているということだ。その意味あいについては、竹山氏の解説を読んでいただくしかないが、「イタリアの70年代は左右のテロが荒れ狂い、80年代になるとマフィアの犯罪が問題になった。イタリアの社会がある程度の落ち着きを取り戻すのは1990年代の後半からだろう。」という解説にビックリ。

日本では1970年の大阪万博以降、70年代は平和で安定した経済成長が続き、80

年代はバブル景気に突入。そして、90年以降「失われた10年」が始まったが、それとイタリアとの違いにビックリさせられる。ちなみに、2009年10月のギリシャの政権交代を契機として発生したギリシャの債務危機は、その後瞬間間にアイルランド・ポルトガル・スペイン・イタリアなどに飛び火し、欧州全体の債務危機に広がったのは記憶に新しい。しかし、私が大学に入学したのと同じ1967年4月にギリシャでは陸軍によるクーデターが発生し、軍事政権が樹立されたことまで知っている人は少ないだろう。本作を鑑賞するについては、このようなバックグラウンドをどこまで深められるかが1つのポイントだが、少なくともそういう問題意識をもって鑑賞することが不可欠だ。

■犯人は本当にアナキスト？警視の疑問は次々と・・・■

本作は「熱い秋」「無実の人々」「並行捜査」「赤い足跡」「尋問」等々の「小見出し」の中で、次々とドラマが展開していくが、登場人物が多いし、当時のイタリアの政治情勢は複雑怪奇だから、その意味合いを理解するのはかなり困難。ただ、1969年のイタリアにおける「熱い秋」がいかに政治的混迷を極めていたかは、本作の冒頭シーンを観ているとよくわかる。しかし、そんな状況下、全国農業銀行爆破事件の犯人は、なぜアナキストだと疑われたの？日本では、1923年9月1日に発生した関東大震災による混乱の中で、朝鮮人の暴動が疑われると共に、大杉栄たち日本のアナキストがこれに結びついているとされて、検挙、虐殺されたが、それと同じように何の根拠も無い言いがかりではないの？ある事件を起こし、それを共産主義者やアナキストの仕業だと右翼やネオナチの連中がみせつけることや、その逆だって十分ありうるのだから、爆破事件の捜査は思い込みなしに、公明正大にやる必要があるのでは？

グイェダ本部長（セルジョ・ソッリ）から捜査の指揮を命じられたカラブレイジ警視はそう考えていたが、どうも上層部はそうではなさそうだ。カラブレイジ警視が取調べのターゲットにしているのは、アナキストのリーダー的存在である鉄道員ピネッリだが、調べれば調べるほどこの男の人間性は信頼できそうだから、カラブレイジ警視には「シロ」の心証が……。ところが、上層部はでっちあげの証拠をピネッリに示してでもピネッリの自供を取れと、カラブレイジ警視に命令。既に3日間にわたって、ほとんど睡眠をとっていないピネッリを取調べていたカラブレイジ警視は、気が進まないままそんな小細工を労してみたが、ピネッリは完全に自供を拒否。そして、以降「黙秘する！」と宣言したからそんな戦法はかえって逆効果だったらしい。さらに、カラブレイジ警視が一瞬取調室を離れた時に、ピネッリは窓から身を投げて死亡してしまったから、さあ大変だ。これは警察への抗議？それとも、追い詰められた挙句の絶望からの自殺？ここから展開してゆく、①ジャーナリストのカミラ・チェデルナ記者（ベネデッタ・ブッチェラット）らを中心とした捜査当局への厳しい追及、②ピネッリの妻リチャ（ミケーラ・チェスコン）から警察への訴訟提起、等々を見ていると、イタリアの民主主義も相当なモノだと感心させられるが、ピネッリはなぜそんな行動を？そして、爆破事件の犯人は本当にピネッリらアナキストなの？それとも……？

マルコ・トゥリオ・ジョルダーナ監督は、それらの疑問をドキュメンタリータッチでは

なく、カラブレイジ警視の苦悩やピネッリの苦悩を生々しくスクリーン上に見せつけながら展開していく。しかし、以降も関係者が次々と広がっていくうえ、疑問が疑問を呼び、だんだんワケがわからなくなっていくことに……。少なくとも私はそうだったから、多分あなたもそうだろう。しかし、そこはしっかりと……。



12/21(土)、シネマート新宿ほか全国順次公開
© 2012 Cattleya S. r. l. - Babe Films S. A. S

■□■特定秘密保護法案が成立したら・・・？■□■

現在、日本の国会では特定秘密保護法案を巡って与野党間の激しい攻防が続いている。去る11月11日には鳥越俊太郎や田原総一朗らの有名なジャーナリストたちが反対集会を開いた。しかし、11月18日、自公とみんなの党との間で「新たに秘密指定の統一基準を首相自身が作成し、閣議決定する」等の大筋合意ができたうえ、19日には「第三者機関によるチェック」について、日本維新の会との協議も始まった。修正協議の最終決着がどうつくのかは予断を許さないが、今会期内での成立はまちがいないさうだ。国家や政府には容易に国民に開示できない秘密情報（国家機密）が存在するのは当然だが、そうかといって何を国家機密にするかを権力者の独断に委ねていいはずはないから、この議論は難しい。

本作を観ると、またプレスシートを読むと「フォンターナ広場の虐殺に、犯人はいない。事件の33年後、すべての容疑者が無罪となった。」らしいが、それは一体なぜ？イタリアに現在日本で審議されているような「特定秘密保護法」のような法律があるのかどうかは知らないが、多分イタリアにも同じような法律はあるだろう。私がそう思うのは、本作では裁判に関する動きはかなり明確に描かれているが、政府や軍、警察そして情報機関に関する動きはあまり描かれていないからだ。ましてや、なぜカラブレイジ警視がCIAと関係があったなどというデマが流されたかについては、マルコ・トゥリオ・ジョルダーナ監督の調査をもってしても解明できなかったはずだ。

本作後半には、銀行の床に置かれたゼリグナイトという爆発物だけではあそこまでの爆発には至らなかったことを知ったカラブレイジ警視が、爆発物には2種類あり、もう1つは軍から横流しされたTNTだと推論したことが描かれるが、もしそうだとすると、あの

大惨事に軍が関与していたの・・・もしそうだとすると、それは一体なぜ・・・？それは、きっと重大な「国家機密」だろうから、イタリアでも現在日本で審議されている特定秘密保護法と同じような法律で、その国家機密は守られているのだろう。

■□■事件の結末は？警視の人生は？■□■

日本では1970年代に、東大の安田講堂事件で逮捕された学生たちの裁判事件をめぐる「荒れた法廷」が名物となった。そして、「統一公判」のあり方をめぐって、判決までにはかなりの紆余曲折があったが、それなりの決着を得た。それと対比すれば、本作における「ファンターナ広場の虐殺に犯人はいない。事件の33年後、すべての容疑者が無罪となった。」という結末には驚く他ない。また、本作に外相として実名で登場するアルド・モーロ外相はキリスト教民主党的政治家で、2度首相になったが、本作の中で「自分がこうした状況の犠牲者になるかもしれない」との予感を示しているように、実際彼は1978年3月に極左テロ集団「赤い旅団」に誘拐され、釈放されないまま、5月に殺害されているから、疑問は疑問を呼び、闇の世界は広がるばかりだ。くり返しになるが、そんな実際の事件を映画化したマルコ・トゥリオ・ジョルダナー監督の執念に驚くばかりだ。

他方、本作で取調室の窓から飛び降りて死んでしまったピネッリと共に、その人間味がタツブリと描かれるカラブレイジ警視の人生は、本作の捜査が終わった後どうなったの？本作には「紅二点」として、ピネッリの死亡後、敢然と警察を相手とする訴訟に立ち上がる妻リチャ（ミケーラ・チェスコン）の他に、カラブレイジ警視の側でカラブレイジ警視を支える美しい妻、ジェンマ（ラウラ・キアッティ）が登場するが、彼女は爆破事件の捜査に神経をすり減らすカラブレイジ警視がホントに心配そう。この夫婦に捜査の最中に赤ちゃんが産まれたのは幸いだが、あたかもピネッリの死亡はカラブレイジ警視のせいのような扱いにはうんざり。さらに、カラブレイジ警視が上司であるグイェダ本部長の指示に従わなければならないのは当然だが、本部長のバックにはさらに政府や内務省、情報局のお偉方のような思惑が・・・。しかし、何とカラブレイジ警視はCIAと関係があったなどのデマが流され、看板にまでその悪口を書かれた挙句・・・。

彼はあくまで警察官として忠実に爆発事件の犯人を追おうとしていただけだが、それを追えば追うほど「国家の陰謀」という大変な事態に巻き込まれていったから、カラブレイジ警視が「この捜査が終われば警察を辞めよう」とまで思いつめたのもうなずける。本作ラストには、美人妻のジェンマに「警察を辞めたら君の親父さんは仕事をくれるかな？」と問いかけるシーンが登場し、ジェンマもそんなカラブレイジ警視を受け入れる姿勢を示していたが、その後カラブレイジ警視に訪れる悲劇的な結末とは・・・？日本では、千葉真一が柳生十兵衛役を演じた『柳生一族の陰謀』（78年）において萬屋錦之介が演じた柳生但馬守の「陰謀」が有名だが、それとは全然規模の違う「国家の陰謀」の前に、一人の警察官の人生や命など安いもの・・・？

2013（平成25）年11月21日記